

〔日本書紀神武〕神日本磐余彥天皇略○中 及年四十五歲、謂諸兄及子等曰略○中 抑又聞於鹽土老翁曰、東有美地、青山四周、其中亦有乘天磐船飛降者略○中 厥飛降者、謂是饒速日歟、何不就而都之乎、戊午年十二月丙申、長髓彥乃遣行人言於天皇曰、嘗有天神之子、乘天磐船自天降止、號曰櫛玉饒速日命。

〔萬葉集雜歌〕角麻呂歌

久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香裳

〔萬葉集略解三上〕磐船は石楠船として、楠もて造て、かたきをほめいふならん。

〔萬葉集十九〕向京路上依興預侍宴應詔歌一首并短歌

蜻島山跡國乎天雲爾磐船浮等母爾倍爾眞可伊繁貫略○下

〔堀川院御時百首秋〕七夕

織女の天の岩舟ふなでしてこよひやいかにいそ枕する

藤原顯仲朝臣

以製作爲名

〔續日本紀元正〕養老三年正月庚寅朔、以船二艘、獨底船十艘、充太宰府。

〔續日本紀考證元正〕獨底船未詳、或曰、蓋獨木船也。

〔倭訓栞中編二十四〕まるきぶね 後太平記に、赤間の丸木船と見えたり、長州赤間が關にて、丸木をゑりて船とするなり。

〔和漢船用集五〕舟名數江湖川船、丸木船 其形、丸木を刻たるがごとし、故に又丸太舟と云、是北國の

はかせ作り、に類す、其舟長く細く深くして、底より兩側板丸くはぎ上て柁なし、上のはぎをおもきと云、水押も立板に丸くはぎ、舳は横舳にて、大立横上あり、右楫の方にそへ立あり、ろくい高く、鐵にて作る、棹櫓を用、帆櫓かね用、旅客舟の内に有て外へ見へず、古津、今津、鹽津、海津等に多し、其外所々にあり、大船は五百石積餘にいたる、棹師の説に、此舟は傳教大師の沓の形なりといへり、